

60 ヨハネ 18章 28-40節

※いよいよユダヤ人のイエスへの裁判は、アンナスのところからカヤパ、そしてローマの総督ピラトのもとへと移されます。ここでは、ピラトが口にした「真理とは何なのか」という言葉が最後に印象に残ります。

1、ユダヤ人はイエス様を総督官邸にまで連れて行きましたが、官邸の中に入らなかったとあります。なぜだったと記されていますか？ (28)

・これは異邦人の中に入っていくと汚れる…そうなるとう過ぎ越しの祭りの食事が出来なくなる…という概念から来ているのですが、そんな規定、律法の書（旧約聖書）にありましたか？

※一部分ではありますが、レビ記 12,13 章を読んでみられることをお勧めします。日本でも一般に、出産後には実家に戻り、安静と育児のため家を離れる習慣がありますし、皮膚病や感染症が生じると隔離して療養するものです。律法（旧約）では、そういう事柄を「汚れ」「汚れの期間」として定めているのです。その中には「異邦人の中に入ることによる汚れ」などの項目は見当たりません。それは彼らとその時代に即して決めた規則でした。現在のユダヤ人が大切にしている教えに「タルムード」というものがあります。1500年の知恵の書として代々語り教えられている、聖書以外のユダヤ人にとって大切なものです。

2、ユダヤ人たちはイエス様のことを「この人が悪いことをしていなければ、あなたに引き渡したりはしません」(30)と言っているのですが、その訴えを聞いてピラトが下した判断はどんなものでしたか？

・(31)

・(38)

・マタイ 27:18

※この裁判に関わり合いたくない、早く終わらせたいというピラトの心境が伝わってくる感じですね、(39)で出した「恩赦」の提案もその表れと見られます。バラバはその当時の極悪非道の強盗の頭でした。さすがにその男とイエスを天秤にかけたら、イエスを選ぶはず…との算段があったと思われそうですが、彼らは「バラバを…」と叫んだのでした。この時のユダヤ人はすでに怒り、ねたみ、嫉妬のためにまともな判断が出来なくなっていたと言えます。あなたの周りにも、それに似た残念な人はいませんか？

3、マタイ 27:16 には、「バラバ」のもう一つの名前が何と記されていますか。

※当時「イエス」の名前はごくありふれた名前であったと言われている。「バラバ」とは「アッバスの子」を意味するのですが、アラム語の発音では「御父（アバ）の御子（イエス）」によく似ていると言われている。「どちらのイエスの釈放を望んでいるのか？アッバスの子イエスか？それともメシアのイエスか？」という読み方ができる。

4、人類を代表してユダヤ人が選び取ったのはどちらでしたか？ (40)

※その結果は、歴史を見ると分かりますね。1947年イスラエル国の再建が果たされましたが、ここでもイエスをキリストと受け入れませんでした。その結果は現在を見れば分かります。

5、ピラトは「真理とは何なのか」と問いました。さあ、真理とは何なのでしょう？

・ヨハネ 14:6

・ヨハネ 18:37

これについて語り合ってみましょう。

6、このところから神様（父、子、聖霊）はどのようなお方でしょう。